

異文化と向き合う過程で自身と向き合い IBコースの学びを、学校全体に活かす

「隠れたカリキュラム」で、
異質性を受け入れていく

在京外国人生徒(以下、外国生や海外からの帰国生徒)以下、帰国生)に公立の教育を受けさせることをミッションとし、1989年に設立された都立国際高校。都内有数の進学校として知られ、推薦・AO入試の進学者が多いことも同校の特徴となっている。また、2015年度には、国際バカロレア(以下IB)コースを開設した。

現在は7割が都内在住の日本人生徒(以下、一般生)で、外国生と帰国生が3割だが、一般生の中にも海外在住経験者が少なくない。帰国生には、現地校に通っていた生徒と、現地の日本人学校に通っていた生徒がおり、帰国生の最終滞在国外や外国生の国籍はさまざまで、例年35カ国以上の多様なバックグラウンドをもつ生徒たちが入学してくる。こうした生徒たちが一堂に会することで、一般の日本の高校にはない異文化が混在する環境が生じる。そこには生徒同士が多様性を認め合おうという「隠れたカリキュラム」が存在するという。

「例えば、時間感覚が一般生と海外から来た生徒では異なります。時間厳守の一般生の姿を見て、海外からの生徒

たちが日本の社会を学ぶのはよくあることです」(荻野 勉校長)

「1年生の最初は、お互いの異質性が理解できずぶつかることがあります。時間が経てば、生徒たちは踏み込んでいい部分とそうでない部分を自ら学び、不文律として一定の距離感を見つけていきます。教員は介入せずに自分たちで乗り越えさせます」(鈴木真人副校長)

「多様でぶつかりあった状態でも、生徒たちには『学校をよくしたい』という想いがあります。大人には難しいことでも、15歳の彼らは無媒介なぶつかり合いを相互理解に変えていきます。そのときに異質なものに対して『自分とは何か』を考えるのです。つまり、異文化理解を進めることは、自分自身を知ることにもなります。自分自身を知って異質なものに向き合ったときに主体的に動けるようになります。そうすると、多様性のメリットを強く得ることができるとです」(岩崎昇一先生)

世界を見た体験を活かした 秀逸な課題研究論文

異質が混ざり合うだけでなく、その異なりの背景を理解するためのカリキュラムも準備されている。ひとつは、2学年と3学年に設定されている「国際

理解」科目だ。日本文化や伝統芸能、外国文学、映像、演劇などさまざまな科目から選択できる。これらは座学だけでなく、例えば伝統芸能を学ぶ授業では、能を学んで、能楽堂で発表会も行っている。演劇や映像の授業でも、生徒たちが作った作品の発表会がある。身体でパフォーマンスすることは、自己表現力の育成に結びつくからだ。また、3学年では外部から講師を招いて講演を聴く「異文化理解」の科目がある。講師によってはすべて英語で講演することもあるという。講演後、生徒たちは毎回レポートを書いている。

「レポートだけでなく、本校では多様性、主体性を核とした言語活動を、重視しています」(岩崎先生)

その言語活動の結集が、2学年、3学年で行う「課題研究」だ。生徒たちは自らテーマを設定し、日本語または英語で論文を仕上げる。

「テーマは、インドの経済について、差別についてなどから、ボディビルダーになるために自ら体をはって実験した結果をまとめた生徒もいるなど多岐にわたっています。英語で世界の貧困問題について書いた日本人生徒もいます。いずれも世界を見てきた自らの体験に基づいたものが多く、説得力があります」(岩崎先生)

「中間発表の際、論文としてのエビデ

多様性・主体性を核とした言語活動の結集

【課題研究のテーマ例】

- 異文化順応
- ヴァイツゼッカーが伝えたこと
- イスラム国は何故勢力を拡大することができたのか
- 日本の中小企業の役割
- 国連と日本
- 個性を伸ばす教育
- 原子力発電の必要性
- 絵本の翻訳



課題研究論文の優秀作品は、冊子にして全校生徒や学校関係者に配布している。

取材文／長島佳子

NSを求めると、ちゃんと自分たちの足で探したり、実験したり、データを揃える工夫を考えてやっています。異文化理解を繰り返し返す日常で主体性が育まれているので、やがて自ら動き出します」(鈴木副校長)

こうして完成させた論文を推薦・AO入試の自己推薦資料として進路に直結させる生徒も少なくない。進学先の大学からは、他校の生徒にはない視点であることに高い評価を受けるとい

う。

「推薦やAOは従来から積極的に指導しているため、本校にはノウハウの蓄



多様な進路へ導く取り組み
 同校では廊下に机を出して、担任が生徒一人ひとりに個別指導する風景が日常的だ。



進路部主幹
 岩崎昇一先生



副校長
 鈴木真人先生



校長
 萩野 勉先生

IB導入による多様性のひろがり



「IB learner profile (IBの学習者像)」は、「IBの使命」を具体化したもので、「国際的な視野をもつとはどういうことか」という問いに対するIBの答えの中核を担っている。具体的には、IB認定校が価値を置く人間性を、以下10の人物像として表しており、都立国際高校でもこのポスターを掲示し、学校全体の目標としている。

- 探究する人
- 知識のある人
- 考える人
- コミュニケーションができる人
- 信念をもつ人
- 心を開く人
- 思いやりのある人
- 挑戦する人
- バランスのとれた人
- 振り返りができる人



海外大学受験が必須のIB生は、多くの課題に取り組みながら研究者としての素地を学んでいく。

学校全体をIBワールドスクールとして意識させるために、生徒が作ったポスター。



多様な生徒を多様な進路へと導く進路指導にも同校は力を入れ、個別指導を積極的に行っている。帰国生や外国生の中には、日本語がおぼつかなかったり、海外で差別を受けた経験から、自分に対してネガティブに捉えている生徒もいるという。彼らが生きてきた経験を、クリティカルな思考で掘り下げさせ、ネガティブなことからポジテ

同校はこれまで以上に世界で活躍

IBコースのノウハウを一般コースの授業にも導入

その意識を高めるため、IBの理念

一人ひとりが自分の価値を見出す進路指導

積があります。また、本校からは毎年10〜20名が海外の大学に進学しますが、その際にもA/O入試のノウハウが生きています。このような進路の多様性が本校の多様性にもつながっているのです(萩野校長)

「一人ひとりが自分の価値を見出す進路指導」イブなことに転換させる指導も行っている。自分と丁寧に向き合えば、彼らがマイナスと思っていた経験の中にも、他の人にはない経験や、これからの人生に役立つものを見つげられるはずだ。「その過程で、主体的に自分が果たすべき役割は何かが見えてきて、それが大学での学びにつながっていきます」(岩崎先生)

「多様な生徒の一人ひとりの良さを、本人がポジティブに認識し、他者からも良い面の評価を受けられるよう指導していくのが、本校の教員の役割です」(萩野校長)

「IBには従来の日本の教育に足りない部分を補うものがあります。その手法を一般コースの授業に取り入れることで、授業にも多様性を生み出せると考え、2017年度から実施していく予定です」(萩野校長)

IBコース導入により、多様性を活かした同校の取り組みがさらに加速し、今までにない公立高校の姿を見せてくれそうだ。

Editor's Voice

人と違うことを強みに転換する進路指導が自己肯定感を育む

帰国生や外国生たちは、一般の生徒たちよりも堂々としているイメージがあり、同校に至っては、難関大学に進学していく生徒も多く、自己肯定感が高いだろうと予想していた。しかし、今回の取材で、彼らがマイノリティ経験から、ネガティブに自分を捉えることもあることを知った。そのネガティブをポジティブへと導く進路指導は、どんな学校にも共通して必要なものではないかと思う。一般の高校でも生徒たちは、家庭環境や習熟度などさまざまな意味での多様性をもち、少しの他人との違いで自分を否定的に捉えることもある。違いの素晴らしさ、自分にしかない経験を掘り下げることで、自己を肯定し、多様性に対して主体的に関われるようになるのかもしれない。